

捻くれぼっちの筈の彼の
死は、何人もの心を
締め付ける。

あなさ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小町と八幡はある日、ららぽーとへと買い物に出掛けていた。夕暮れ頃、八幡達は家路につき帰る途中、不審者に出会った。その不審者は八幡の妹、小町に目を付け、殺しに掛かってくる。

ズブリ

嫌な音を立てて貫かれたのは、小町を庇った八幡だった。

そして彼は命を落とす。

これは、八幡の居なくなつた日常を過ごす、彼と関わりの深いもの達の物語。

目次

お詫びの報告	1
伝達編	
死亡	3
発見と伝達	8 / 1 / 2
お兄ちゃんなら	23
由比ヶ浜結衣と雪ノ下姉妹	29
《前編》	
【後編】	
由比ヶ浜結衣と雪ノ下姉妹	36
友情の再確認	43

お詫びの報告

これから、私事で暫く作品の更新が出来ません。

期間は大体2〜3週間程度です。

実は、私学生でして、この作品の次話を執筆していたら、父にやり過ぎだとスマホを取り上げられてしまいました。

現在、父に頼み込んで皆様へのお詫びを書かせてもらっている次第でございます。

2〜3週間というのは、父が私に出した取り上げの期間です。

私の作品を読んでいたのは、父が私に出した取り上げの期間、誠に申し訳ございませんでした。

虫がよいかも知れませんが、今後とも、この作品を読んでもいただくと幸いです。

本日は誠に、申し訳ございませんでした。

2 お詫びの報告

.....

伝達編

死亡

【小町 高校三年】

時がたつのは早いもので、小町ももう高校三年生、といつても、今日が卒業式なんだけれどね。

いつものようにお母さんにたたき起こされ、みたいなことは無く朝早くに目を覚まし、グーツと背伸びをした。

朝の伸びはやっぱり気持ちがいいなあ。

そうやって制服に着替えて、少しロングに伸ばした髪と伊達めがねをかけて、ご飯を食べに下に降りる。

そこには、親の姿は無かった。

まあ、仕事に行っただけなんだけどね。

お父さんは学校に向かったけど……

はあ……

小町「相変わらず小町に甘いなあ」

正直、ちよつとウザい。

そして、のそのそと朝食を食べ、歯磨きをして鞆をもった。

そして、日課の仏壇に向かう。

線香にひを付けて灰に差し込み、三回チーンと鳴らして

南無阿弥陀物と唱えて一礼をする。

小町「おじいちゃん、おばあちゃん、小町ももう卒業です。結衣さんと雪乃さんにア
ドバイスもらったこのロングとメガネ、似合うかな？」

小町は、見せつけるように髪をかきあげ、眼鏡をくいつと上げる。

何だか呆れられた気がする……

さてと、次はー

小町「お兄ちゃん、小町もう卒業するんだよ？総武の奉仕部もついで、お兄ちゃんみ
たいに過ごせたかな？あ、でも小町ぼつちじゃないや。……あれから二年もだったけ
ど、まだ小町は寂しいなあ……。あと、向こうでぼつちじゃないかも心配。それじゃ、
行つてきます。」

そう言つて、立ち上がった。

その時、何となくだけど、『おう、いつてこい』って、お兄ちゃんの声が聞こえた気が

した。

小町は、誰も居ない家に、その空耳に答えるように――

小町「うん、いつてくるであります！お兄ちゃん！」

満面の笑みで、そう言つて、玄関をあけて、学校へと向かつた――

【二年前】

それは――突然だつた――

比企谷八幡は、世界中で最愛の妹、比企谷小町とららぽーとに買い物に（強制的荷物持ち）出掛け、その帰りの最中だ。

今も、どーしようもない下らない話をしながら帰っているのだ。

小町は、口を開けばやれあの二人とはどうだー、とか、やれこれだからごみいちやんは、とか。

八幡の方もやれなにいつてんだ、とか、うぜえ、だとか、捻くれた返答しかしてない。

だが、それが二人にとっての心地良い距離感で、この先も続くと思われていた。

だからこそ、この後に起こつた事は、全くの予想外なのである。

流石小町、俺のことを良く分かっていらつしやる。

小町「はあ、これだからごみいちやんは……そこは『いや、全然大丈夫だ。心配かけてごめん、ありがとうニコツ』って言う所だよ？ま、そんなお兄ちゃんも好きだけどく。あ！今の小町的にポイント高い!!」ニヒツ

と思つたら全然そんなこと無かつた。

小町ちゃん、お兄ちゃんはそのんな事言わないよ、て言うか言えないよ。何で俺がそんな事言わなきゃあかんのや。葉山か。

八幡「うぜえ……ま、んなこといわねえけど、ま、持つのは任せとけ。」

小町「お？捻ぢレ発動ですなあ！」ニヤニヤ

何？その呼び名定着してんの？

ちよつと、お宅の娘さんどうなっているの？あ、妹か。

八幡「何だよその謎言葉。コナン君の事件の暗号なの？馬鹿なの？死ぬの？てか、デレてねえし、呆れただけだし。」

小町「何でコナン君にそんな言葉が出てくるのさ？それに小町馬鹿でもないし、お兄ちゃんの目みたいに死んで腐るのもまだ先だよー。」

八幡「おい、絶対一言余計だろ。」

小町「フン！小町は知らないのです………時にお兄ちゃん、最近結衣さんとか雪乃さ

んとかとはどうなのさ？」ワクテカ

来たよ、何でかコイツはあの二人をやたらと気にかける。何故だ？あれか？兄がいつも世話になっておられます的な？その割にはやたらと恋愛方面に関する事なんだよな。まさか、あの二人……！

でも、八幡強い子。勘違い、ダメ、ゼツタイ。

八幡「は？何であいつらが出てくんだよ。特に何もねーし、何か有つてもそれは偶然で、勘違いをしてはいけないんだ。そもそもー」

小町「あーもー分かった、はあ、これだからごみいちちゃんは……小町はお二人が不憫で仕方ないよ」ヨヨヨ
うざっ。

でも小町可愛い。戸塚と二人で大天使コンビ組んでくれねえかな？トツカエルとコマチエルで。

小町「お兄ちゃん？今絶対失礼な事考えてたよね？」

うわなにこいつ、エスパーなの？テレパシストなの？

コマチストって呼ぼうかな。

……いや、止めておこう。もしそんな事したら地に着いている俺の好感度が、マントルまで到達しちゃうよ。あらやだ怖い。

ま、適当に言い訳するか。

八幡「ふ、小町よ、俺がそんな事考える奴に見えるか？お兄ちゃん傷つくぞ？」

小町「え？違うの？」キョトン

コイツ、本気でキョトンとしていやがる。

このガキヤアア……でも、可愛いから許す！

俺達は、こんな会話のキャッチボールならぬドッチボール（主に俺が被害者）を繰り広げながら家路を進む。

もう日の暮れる時間で、夕方の夕日が俺達を照らして、小町の顔がいつもより赤く見える。俺の顔も、夕照りしてさぞかし赤くなっているだろう。

これは妹じゃなかったら惚れてますね、はい。

ーだが、そんな幸せな時間は、長くは続かなかったー

家の数百メートル先、曲がり角を曲がった所で事件は起きる。

何百メートルか先に、こちらに向かってくる影が見える。

いや、それだけならまだいい。

だが、明らかに様子がおかしいのだ。挙動不審で、妙に殺気立っていて、足取りも覚

束ないようだ。

不意に、ピタッと目があってしまった。俺は、恐らくこの人生の中で、ここまでの悪寒を感じたことは無いだろう。まるで、自分の中の何か、最大限の警告音を発しているかのようだ。

こっちくんよな……こないよな？

しかし、願っても虚しくその陰はこちらに向かってくる。

猛スピードで、おそらく、全力疾走で。

小町「ヤバイ、何か分かんないけどヤバイよお兄ちゃん！」

小町も、異常を感じ取ったようだ。ま、誰でもきづくわな、そりや。

そして、段々とその姿が見えてくる。

黒いコート、黒のニット帽、サングラスにマスクをつけて、典型的過ぎんだろ……ん？今手元が光ったような……？

まさか!!

気付いた時には、時既に遅し。その男は、もうすでに数メートル先までちかずいてきていた。

その目線は俺ではなく、小町をとらえていた。

マズい!!

どうする？我が身かわいさに見捨てるか？

いや、そんな事したら俺は自殺する。

なら助けるか？

痛いのが、傷つくのが怖いか？恐ろしいか？

今更だ。

なら、決まりだな。

八幡「小町いい!!」

男に背を向ける形で、小町の前に立ちふさがり、突き飛ばす。そして――

男『ちいつ、邪魔するなあ!!』ブンツ

八幡「つあ……!逃げろ!!小町!!」ズブリ

逆上した男の手に握られたナイフが、俺の身体を貫いた。

こんな時なのに、意外と俺は冷静で、激しい痛みが身体を襲う、だが、ここで倒れたら、小町も死ぬ。

俺みたいなゴミが死ぬのは構わん、だが、小町は駄目だ!

小町「きやつ……え？」

八幡「早くしろ!!死にたいか!!」

小町「でも、お兄ちゃんが!!」

あ、今の八幡的にポイント高い。こんな時でも俺の心配か。優しいな小町は。やっぱり俺の最愛の妹なだけはある。

だが、ここは何としてでも逃がさないと、何とか、…よし。

八幡「大丈夫だ…」

小町「…でも…！」

八幡「小町…必ず後を追う、だから、行け。」

小町「ツ…うん、絶対だよ？」

「…いいんだ、これで…」

八幡「ああ、約束だ」

「…これで、小町は助かるんだ…」

「…たとえ嘘をついても…」

「…俺の大嫌いな欺瞞を使ってでも…」

小町「っ」ダッ

男『待て!』ダッ

八幡「それは、こっちの台詞だ。」ガシッ

さて、逃がさないようにしないとな。

俺は、男のズボンの裾を握り締め、引っ張る。

男『離せっ！クソっ!!』

そうこうしてると、小町の姿は見えなくなっていた。

もう大丈夫だ。

これが正しいんだ。

——死んでも誰も傷つかない、俺が死ぬべきだ——

——ほら、簡単だろ？——

八幡「誰も傷つかない世界の——完成だ」

男『クソがあ!!』

——8／1、くしくも誕生日の一週間前、俺、比企谷八幡の17年は、ぷつりと、死に際だけはカッコつけて、幕を閉じた——

発見と伝達～8／1～2～

小町はある程度逃げた所で、近くの交番に駆け込んだ。
目を真つ赤に腫らして、泣きじやくりながら。

【小町 side】

——八幡が死んでから3分後——

何だろう、さつきから妙な胸騒ぎがする。

心の奥が森林になったみたいに、ザワザワって。

早く、早く助けなきゃ！

【交番】

小町「助けてハア…：さい!!おハア…：…んが、死んじや…：…！」

早く、早くお兄ちゃんの所へ!!お兄ちゃんが死んじやう!!

お巡り「どうしたんですか!?一回落ち着いて下さい!!」

あーもー、落ち着いて何てられないよ!!このアホ!

まどろっこしい説明なんてしてたら遅いよ!

小町「とにかく来てください!!」グイッ

小町は、お巡りさんの手を掴んで走り出します。

お巡り「え!? え!? ちよ、え!?」オドロキ

小町「急いでください!!」

キョドリすぎてるけど気にしないのです。

そんな事よりもお兄ちゃんが……

お巡り「は、はいっ!」

小町（お兄ちゃん……生きてて……）

気が付いたら、いつの間にか小町の頬に涙が伝っていました。

小町はやつぱり、お兄ちゃんが大好きなんだなあ、と自覚するとともに、今までの不安が更に重く感じました。

大好きな人が死ぬって、考えただけでも心が握りつぶされそうです。

お巡り「あのお……」

警察の人が聞き辛そうに申し上げてくる。

ああもう、うじうじしないでよ!!

小町「何ですか!?! 早くしないとお兄ちゃんが……」

お巡り「私、まだ連れ出された理由を聞いていないので、職務上色々聞かないと……

連絡する必要も有りますし……」

あ、本当だ、小町説明してない。

いや、厳密に言えばしてるんだけど、息切れして上手く話せなかったし、それどころじゃなかったし。

小町「走りながら返事するので端的にお願いします！」

お巡り「はい、では、理由を」

小町「お兄ちゃんが……不審者に私を庇って刺されました」

あつ、と声に詰まる警察の人の声が聞こえる。

でも、すぐにコホンと咳払いをして続ける。

お巡り「では、その時の状況、場所をお願いします。」

小町「買い物の帰り、刺されそうになった私をお兄ちゃんが突き飛ばして逃がしてくれました。場所は家の近くの曲がり角！住所は○○○▼▼◇です！」

あれ？小町街中で大声で住所言っちゃってるけど大丈夫でしょうか？

いや、気にしたら負けだよ！

お巡り「あなたのお名前は？」

小町「比企谷小町！」

お巡り「あなたのお兄さんの名前は？」

小町「比企谷八幡！」

お巡り「分かりました。ご協力、感謝します。」

そう言うと、警察の人はおもむろにトランシーバーを取り出します。

多分、さつき言っていた応援を呼ぶのだろう。

何だかドラマのワンシーンみたいだ。

……本当に、ワンシーンだったら良かったのに。

そんな事を考えて走ること五分、さつきの場所が見えて来ました。

小町「…………お兄ちゃん!!」

小町は、警察の人の手を離して走り出します。

小町（お願いします神様…………お兄ちゃん…………どうか無事で…………!）

後はこの曲がり角を曲がればお兄ちゃんが……

そこまで来た所で、小町の足が止まってしまいました。

さつきまでの勢いを追い越されて、八分前の情景が蘇ってきたのです。

刺された時のお兄ちゃんの苦悶の表情、滴り落ちる血液、血走った目でこちらに睨みを効かせてくる男の顔、

リアルに何度も頭の中に蘇って、脚が竦んでしまったのです。

でも…………それでも……

小町「……………つ」

小町は、一歩踏み出しました。

ゆっくりりと、顔を曲げて――

小町「…………お兄…………ちゃん？」

小町は――

小町「あ、…………あ…………」

その目に入れてしまいました――

小町「ああ…………」

背中にナイフが刺さっていて、チャームポイントのアホ毛がだらしなく垂れ下がった、お兄ちゃんの姿を。

小町「いやああああああ!!! ああああああああああああああ!!! あ」
プツリ

と、小町の中で何かが切れる音がした気がして、そこからの記憶は有りません。

――

気が付いたら、小町はベットに横たわっていた。

視界がぼんやりと霞む中で――

――何だ、夢だったのか。

そう思い、むくりと身体を起こす。
でもー

親父「小町！」

母親「小町!?!目が覚めたの!?!」

涙に顔を歪めた両親と、ツンとくる消毒の匂い、白い壁とピンクのカーテン。

それを目視して、ああ、此処は病院か、と認識する。

置いてある日めくりカレンダーは、8/2になっていた。

どうやら、丸一日も寝ていたらしい。

その思考と並行して、お兄ちゃんの事が頭に浮かんでくる。

何となく、答えは分かっているけども、それでも、聞かすにはいらなかった。

小町「ねえ……お兄ちゃんは……?」

そう、問い掛けた。

やっぱり、二人は首を横に振った。

分かっていた、分かっていた。

この返答は分かっていた。

でも、分かったからと言っても、受け入れることは容易ではないのだ。

心が、締め付けられた。

小町「う、うあ……ああ……」

ポロリと、大粒の、一滴の涙が、小町の瞳から、零れ落ちた。

小町（小町のせいで、お兄ちゃんが……小町が、お兄ちゃんを無理矢理買物になんか連れて行ったから……）

小町（あれ？もしかして、お兄ちゃんを殺したのって……小町？）

そう考えたら、涙は、もう、止まらなくなっていた。

その涙には、兄の死に対する悲しみ、拒絶、兄との十六年間の思い出、もう兄と一緒に居ることが叶わなくなった現実に対する絶望も含まれていた。

だが、最も小町の涙腺から涙を溢れさせたのは、兄の死は自分のせいだ、という強く、重く、圧してくる、罪悪感からだった。

小町「う、うあああ……あああ……！あああ……お……にいちや……おにいちゃん……おにいちゃんおにいちゃん……あああ……うあ……つ」

それから、ひとしきり泣いた後、兄との会話の最中に出て来た二人の顔が浮かんできた。

そう、由比ヶ浜結衣と、雪ノ下雪乃だ。

ぼつちで卑屈だった兄、比企谷八幡を、受け入れ、歪んだやり方しか出来ない兄に真っ向からぶつかって、逃げないで、兄の求める☑本物☑に、最も近い場所、奉仕部の部員だ。

小町も受験に受かって、お兄ちゃんとあの二人も三年生になって大学受験に向かって勉強してたから、活動してたかどうかは知らないけど、少なくとも、家でその話題が出ていたし、関わりはあるのだろう。

ならば、学校で知らされる前に、あの二人には伝えておこうと、そう思った。

小町「電話、しなきゃ……」

小町は、震える手で鞆から携帯を取り出して、電話帳のアプリから二人の名前を探して、まず、最初に見つかった結衣さんのほうに電話をかける。

二コールもせずに電話に出た。

結衣『小町ちゃんやつはろー!!』

相変わらずのハイテンションで、何だかいつもと変わらない日常みたいだ。

小町（でも、小町には、いつもどおりに返す気力はないです）

小町「こんにちはは結衣さん……あの、大事な話があるんです……」

それを聞くと、結衣さんも何となく分かってくれたみたいです。

流星に空気を読むのが得意と言っているだけはありません。

結衣『なにかな？小町ちゃん
軽く深呼吸をしてーーーー』

小町「あーーーーー」

お兄ちゃんが、死にました。
結衣「……………え？」

お兄ちゃんなら

そこから十秒程、由比ヶ浜由衣からの返信は無く、ようやく、返ってきた返信も、弱々しい声だった。

結衣『……小町ちゃん、冗談、だよね?』

小町（結衣さんからは、そんな言葉が返ってきた。

まあ、誰だつてそうなるよね。

いきなり、知り合いが死んだ、何て聞かされたら。

でも、これは、これだけには、向き合ってもらわないと。）

小町「冗談だったら、どれだけ良かったことか……」

結衣『……も、もう……あ!分かったよ!ヒッキー、どうせそこで聞いてるんでしょ!?私の取り乱し方を見ようとか思ってるんでしょ!?小町ちゃん、ヒッキーに変わってくれる?今日はもう怒つ「結衣さん!!!」っ……』

小町は、結衣の声を遮って、ここ最近一番の声で叫んだ。

そして、

小町「小町だって……こんなこと、みどめだぐはないですけど……!!お兄ちゃんは……本当に!!……死んじやったんですよ……うあ」

次は、さつきとは対照的に、消え入るような声で、堪えていた筈の涙をポロポロとこぼしながら、ろれつも回らなくなりながら、伝えた。

そして、電話の奥から聞こえてきたのはー

結衣『……本当に……ヒツキー、死んじやったの……?』

いつもの結衣と違う、しおらしい声だった。

その声は、聞いているだけでも心が痛むような、締め付けられるような、普段の彼女を知らない人でも、知っているなら尚更そう感じさせる声だった。

小町「ええ……本当です」

一方、小町の方は、力強い声のようで、どこか取り繕った、空っぽの、虚空に投げかけるような声だった。

結衣『………そっかあ……ヒツキー……死んじやったのかあ………ごめん、ちよつと電話切るね、あ、ゆきのんには私から連絡しておくから……じゃあね』

ピッ

そして、結衣は一方的に電話を切った。

それから少しして、カラカラと扉の開く音がした。

そこには、目を真っ赤に腫らした母と、必死に隠しているけども、まだ目の赤い父がいた。

どうやら、気を使って外に出てくれていたらしい。

そして母達に続き、直ぐにスーツ姿で中年頃見受けられる大柄な男性と、白衣を来た若いお兄さんが入って来た。

二人はズカズカと私の方に歩み寄ってきた。

最初に口を開いたのは、大柄な男性の方だった。

??? 「比企谷小町ですね。私、警察庁捜査一課課長、近藤敦と申します。お兄さんの事について、お訊きしたいのですが」

その男性は、近藤敦と名乗った。

声は、人情何で籠もっては無く、ただただ仕事で訊いているだけという、何だかぞつとするような、小町とは違うタイプの空っぽの声だった。

そこに、白衣の若い男が口を挟む。

??? 「刑事さん、今比企谷さんはとても答えられる状態ではありません。二、三日時間を置いて、それから事情聴取を行って下さい。」

こちらは、強い使命感と、医師としての責任感を強く含んだ声だった。

しかし、

近藤「しかし澤畑先生、此方側として早期解決の為に素早い事情聴取が必要なので
す。」

相変わらずの淡々とした返答をする。

どうやら、白衣の人は澤畑先生というらしい。

澤畑先生は、それに対して

澤畑「いえ、此方としても患者が心に大きな傷を負っている以上、見過ごす訳には生
きません。」

こう、返答した。

小町（あ、いい人だなあ）

小町の衰弱した脳でも、それはすつと分かった。

でも、近藤という人も引いてはくれない。

近藤「先生、あなたなら、多くの命と、死にはしないけれど心の病んだ一人の患者、ど
ちらを救いますか？」

小町は、何となくだが、この近藤という人は、兄に似ていると、そう思った。

誰だつて救おうと、本質を分からない愚か者、世間から見たら立派な善人達は、必死
に意味なくもがいて、勝手に解決した気になって、目に見えない位下のたった一人には

目を向けない。

その一人が、自分以外全員を救い、自分を犠牲にしたことを知らずに。

この人は、その考えを、兄と似てはいるが、少し違って、それを他人に当てはめる事が出来る人なんだろう。

小町（これが分かったのも、全部お兄ちゃんから教わったものの産物だね）

小町（まあ、こんなのお兄ちゃんなら絶対認めないけどね。）

小町（お兄ちゃん、自分が傷つくのは全然気にしないのに、他人が傷つくのはスツゴい嫌いだからなあ……）

小町（でも）

小町（今日からは、出来る範囲で、お兄ちゃんになつてみようかな）

澤畑「しかし!!」「あの……」どうしました?」

小町「私、受けます」

近藤「話が早くて助かります。それでは此方へ」

私がそう答えると、少し驚いた顔を見せた後、すぐにまた無表情に戻り、私を扉まで連れて行ってくれた。

そこで、澤畑さんが呼び止めてきた。

澤畑「比企谷さん? アナタはまだ病院で療養するべきです。じっくりと治療しない

と、アナタの心の傷は癒えませんか？」

そんな、最もらしい先生の呼び止め、小町は立ち止まって振り返り、

小町「いいえ、大丈夫です。確かにまだ辛いですけど、他の人が死んじやうのも嫌です。なんか、自分のせいだーってなっちゃうかも知れないので。それにーー」

ーー兄なら、きつとそうします

もう既に涙を堪えられてない両親と先生に、不思議と出た、多分お兄ちゃんのお陰で、満面の笑みを見せつけるようにして、私は病室をでた。

由比ヶ浜結衣と雪ノ下姉妹 《前編》

時は物語から少々遡り、小町からの通話が終わって直ぐの事――

【結衣 side】

あたしは、手に持っていた携帯がスルリと落ちたことにさえ気付かない位、現実を受け入れられなかった。

本当は、本当にドツキリか何かだと信じたいけど、さっきの小町ちゃんを感じから多分本当なんだろうな。

本当に、ヒツキー死んじやったんだ。

私の思い人は、私の友達は、私達の『本物』を作って、守って、傷ついてくれていた人は、私の部活メイトは、私のクラスメイトは、本当の本当に、いなくなっちゃったんだろうな。

それを自覚しなきゃという自分と、認めるのが怖い自分が心と頭をぐちゃぐちゃにかき混ぜる。

頭の中に、ヒツキーと過ごした、ゆきのんと過ごした、三人で過ごした、あの辛くて、

悲しくて、楽しくて、本音を言えて、あたしの人生で最高に幸せだった時間が、その一瞬一瞬が忙しく、せわしなく過ぎり続ける。

その時、ほっぺに熱い何かがつう、とつたつた。

涙だと、自覚したときにはもう止まらなかつた。

結衣「う、……ああああ……あああああああ!! うあああああああああ
あああ!!……ふえつく……うああ……」

途端に体の力が抜けて、膝から崩れ落ちた。

ゴンと膝を床に打ち付けたけど、痛みを感じない位に、私は泣いている。

涙も鳴咽も絶叫も、まだまだ止まらない。

結衣「ああああ! つあ……うあああ!! わあああああ!! やだよ、嫌だよ!! ヒツギー死
んじやだよ!! やだよだよだよだよだよ!! あああ!! なんて! なんて! なんて!
で! なんてヒツギー死んじやつたの! なんてよ!! なんてよ!! ああああ!!」

それから私が泣き止むまで、五分位かかったと思う。

でも、コレは私の感じた時間で、実際はどれ位経つたのか分からないけど……

ああ、もう三人で過ごせないのか……

………こんなこと考えちゃ駄目だ、涙が止まなくなっちゃうよ。

結衣「あ、ゆきのんに電話しないと」

ふっと、小町ちゃんに言った事を思い出して、私は床に落とした携帯を涙でびしょびしょに濡れた手で持って、電話帳のアプリを何とか開く。

画面に度々水滴がポタポタ垂れて、そのたびに拭くけどまた水滴は垂れてきて、上手く操作が出来ないや。

それでも何とかゆきのんの名前を探し出して、タップして電話をかけた。

一コールの途中で、ゆきのんは電話に出た。

雪乃『もしもし、由比ヶ浜さん？どうしたのかしら？』

今からヒツキーが死んじやったのを、私の口から伝えないといけないのか……

辛いなあ……凄いな、小町ちゃん。

これをやったんだから。

やつぱりヒツキーと似てるな、そういうところ。

私も、ゆきのんにだけは、少なくとも、ゆきのんにだけは、伝えなきゃ。

スウーハアー、スウーハアー

よし。

雪乃『あの、由比ヶ浜さん？要件がないなら切っていいかしら？今姉さんが部屋に来て対処が……』『何々ガハマちゃん？ひやつはろー！』ちよつと姉さん!?電話中よ?常

識的な判断を『えー？いいじゃーん！それでそれで？どしたのガハマちゃん』はあ……』

………陽乃さん……まあ、どうせ伝わるし……

でも、今はゆきのんにだけ伝えたいな。

分かんないけど、直接伝えないと行けない気がするから。

そうしないと、私は多分一生、後悔するから。

結衣「あの……ゆきのんに変わって頂けますか？今回はどうしてもゆきのんに直接伝えたいんです。」

苦手意識を持つ陽乃さんに、私は意を決して言ってみた。

陽乃『えー？そんな事言われたらお姉さん気になっちゃうなく？ほらあ言ってみなよ』

でも、分かっていたけど陽乃さんは簡単には引いてくれない。

それはそうだよ、陽乃さんはこういうことに物凄い興味を示すからなく、特にゆきのんに関する事だし……

でも、これだけは譲れない。

これは、私達奉仕部が向き合わないといけなく、認めたくない現実なんだから。そう、現実なんだから、受け止めないといけなく。

だからこそ、これはゆきのんに早く伝えないといけない。
だから、今日だけは、陽乃さんに突つかかる。

結衣「すいません陽乃さん：今回ばかりは、今回だけはどうしても譲れないんです。
もしも気になるならゆきのんから聞いてください。

お願いします、これは、私達奉仕部が、長い時間を掛けて乗り越えなきゃいけない現実
何です。だから、お願いします。ゆきのんと話させて下さい。」

そこまで言うのと、陽乃さんはぶつくさ言いながらも、ため息をついてー

陽乃『はあ：分かったよ。今回だけだよ？雪乃ちゃんの友達のガハマちゃんだから許
してあげる。』

特例だよ？」

そう言つて、OKしてくれた。

結衣「ありがとうございます」

いつもの私なら大声で喜んでるだろうけど、今回ばかりは暗く沈み込んでいて、淡々
と、お礼を言つた。

それからちよつとばかりして、ゆきのんが出た。

雪乃『ごめんなさい由比ヶ浜さん、姉さんが迷惑をかけてしまったみたいで……それ

で、どうしたのかしら?』

いざ伝えるとなると緊張するなあ…

心臓がバクバクいって、でも恥ずかしいとかじゃなくて、悲しくて、辛くて、胸が張り裂けそうな、そんな感じ。

……でも、言わないと。

今、伝えないと。

スウー…ハア…

スウー…ハア…

………よし。

結衣「ゆきのん…悪いお知らせがあるの、スツゴい悲しいお知らせ。

でも、絶対に逃げないで、お願い」

そういうと、ゆきのんは何秒か開けてから返事をした。

雪乃「……分かったわ、何があるうと絶対に逃げない。約束するわ」

強い声で、そう言った。

言ってくれた。

それだけで、ほんの少しだけ心が楽になった。

……よし。

結衣「じゃあ……言うね？実は—————

ヒツキーが……死んじゃった。」

そして、私は、ゆきのんに伝えた。

伝えたくない、でも伝えないといけない、認めたくない現実を、投げかけるように、伝えた。

それを伝えた時、私の心の中の何かが、崩れて、消えちやったような感じがした。

由比ヶ浜結衣と雪ノ下姉妹 【後編】

【雪乃side】

私は、言葉を発することが出来なかつた。

と言うより、言おうとした言葉を詰まらせてしまった、というのが正しい表現なのかもしれない。

私は、『あら、由比ヶ浜さんもそんな冗談を言うのね、脳がレベルアップしたのかしら？小学生に。』と言おうとした。

でも、それは恐らく逃げないという約束を破ることになる。

つまり私は、虚言をはいたことになってしまう。

そんな事は絶対に認めない。

それと、それを言おうとした瞬間の、電話の奥から聞こえてきた音のせいでもあつた。そうそれは、私が答える前の、由比ヶ浜さんの、はしたないようだけれども、鼻水を『ズズツ』と吸つたような音。

単なる鼻風邪かとも思ったが、特に彼女の声は鼻声でもないし、夏風邪ならば、わざわざ誰かに電話するような頭に響く事はしないだろうし。

ということは……

雪乃「由比ヶ浜さん…あなた、泣いているの？」

こういうことかしらね。

結衣『…あはは、やっぱ分かっちゃう？これでもさつきスツゴい泣いたんだけどね……』

ヒックと、泣くときの人特有のしやつくりが由比ヶ浜さんから聞こえた。

ということは、やはり、本当なのね。

雪乃「そう…本当に比企谷君は……」

何だか、身体の半身をもがれたような気がした。

心の中の核のような、中心の半分が急に虚無に消えたような、今までにない感情が湧き上がる。

でも、彼女の前でこの感情をさらけ出してはいけなと思った。

何故かと問われれば、直感としか言いようが無いのだけれど。

今までの彼女と過ごしてきた、甘く、苦い時間。

そこからの経験とすべきなのかどうか迷うところだけれども、何となく、私の頭に浮かんできたのだ。

——由比ヶ浜結衣は、今私が泣いたら、取り乱したら、罪悪感に潰されてしまう、と。

—— 由比ヶ浜結衣は優しく、強くて、でもつい空気を読んで他人と自分を傷つけないようにして来た、弱い女の子だ ——

—— それは、私達奉仕部の中でも変わらず、というわけでも無く、彼女は彼のおかげで『本物』に近づいてからは本当の本心を話すようになった ——

—— 欺瞞に溢れた虚偽いつわりの言葉ではなく、欲にまみれた本心を ——

—— 少し言い方が悪いかも知れないが、それが本心というものだ ——
—— しかし、それでも稀に、偽物の彼女の顔が覗く ——

—— 怯えて震える、弱い彼女が、 ——

恐らく彼女は、奉仕部の仲間として伝えねばならないという強い使命感と、傷付けたくないという感情が、頭のなかでせめぎ合っている感じなんだろう。

ならば、せめて私だけでも、

雪乃（平静を保たなければならぬわね…）

そう、思った。

そうしなければならぬと。

例えそれが欺瞞で、私の大嫌いな虚ともなろうとも、彼女を傷付けないための最善の策を演じなければ、と。

心の底から、自分を嫌悪する感情が湧き出る。

これではまるで、私が、私達が最後まで否定し続けた、彼のやり方じゃない。

なにが、『アナタのやり方、嫌いだよ』よ。

今の私がそれじゃない。

でも、やっぱり彼も嘘つきだったのね。

私も、あなたの言葉を借りるなら、ぼっちというものだけでも――

ちつとも、大丈夫じゃ無いじゃないじゃない。

でも、彼はやり抜いた。

私も、やり抜かないといけないわね。

例え、由比ヶ浜さんと先程交わしたばかりの、逃げないという約束を破ることになるうとも。

雪乃「そう、比企谷君の御家族様もご愁傷様ね。彼が死んでしまったのは何時なのか

しら。まあでも、事件に巻き込まれた訳じやないだろうし、死亡時刻もわからないわよね。それにしても、彼は一体どのように死んでしまったのかしら？いつもいつも死にそうなる顔をしていた彼がどのように『ゆきのん』……ごめんなさい、失言だったわ。」

由比ヶ浜さんは、何時もとは違う、少し威圧感のある声色で私の言葉を遮った。
そして、

結衣「あの……なんていうか、その、ゆきのんが私のことを心配してくれてるのは嬉しいんだけどさ……そのせいでゆきのんが辛いのが我慢するのも、私的にはちよつと辛いかな……？」

今度は優しいというより、悲しみの割合の強い声色で、そう言った。

……ふふ

由比ヶ浜さんには、私のことはお見通しね。

ちよつと悔しいけれど……

その時に私はまだまだだとおもった。

彼女の真の優しさを、読み取れなかったのだから。

でも、どんなに泣きたくても、姉の前で弱さを見せたくない自分がいた。

いつもいつも追いかけてばかりの背中に、弱さを晒したくはなかった。

雪乃（そうね……姉さんには席を外して貰いましょう……まさか、自分が泣くために

姉を追い出すなんて、甘い理想を抱くのね、私も。……傲慢ね。）

雪乃「姉さん、悪いのだけれど席を外して貰っても……っ!」

そこまで言った所で、姉さんが私に抱きついてきた。

そして――

陽乃「雪乃ちゃん、ごめんね? お姉ちゃん話全部聞いちゃったの。だからさ、雪乃ちゃん……無理せず、弱さを見せてくれないかな?」

そう言ってきた。

姉さんに弱さを晒す?

冗談じゃないわ。

そんなことしたら、また、姉さんから突き放されてしまう。

大体――

そんな考えを遮って、姉さんは、私が想像しなかったことを口走った。

陽乃「私も、雪乃ちゃんに、弱さを、見せるから……だから、今の気持ちを、殺さな
いで?」

そこまですられると、なんだか、耐えている自分がちっほけに思えて、途端に、秘めた感情が膨らんで、もう、ダメだと思った。

そしてー

雪乃「姉さん……ちよつとだけ、胸をかして貰えるかしら？」

陽乃「うん、その代わり、私も抱き締めさせてもらうからね……」

雪乃「ええ……構わないわ」

ギョツ

陽乃「……つう」

雪乃「……ああ……」

そして、この日二人は、まるで仲の良い兄弟のように、いや、悲しみを分かち合う親友のように、永く、永く、悲しみのまま、泣いていたー

部屋には、携帯から聞こえる微かなすすり泣きと、二人の姉妹の泣き声が、静かに、響き渡ったー

友情の再確認

私と姉さんが泣き始めて、どれくらいの時が経ったのかは分からないけれど、私はようやく落ち着いて思考を巡らせることが出来るようになってきた。

何となく、誰に見られている訳でもないのだけれど、なんだか姉さんと抱き合っているのが気恥ずかしくなって、ゆっくりと密着した身体を離れた。

こんな状況でも羞恥心は働くのかと、素直に驚いている。

姉さんの顔を覗くと、スウスウと寝息を立てていた。

何時も何時も完璧な、背中ばかりを見ていた私の姉の顔は、相変わらずの美貌に、涙の跡と隈が浮かんでいた。

泣くなど慣れないことをして、身体的に疲れて寝てしまったのかしら。

それに、今日はお母様からの呼び出しもあったようだし……

それにしても……

雪乃「姉さんが泣くだなんて、とても意外だったわ……」

彼のことは、精々面白いオモチャ程度としてしか扱っていなかったと思っていたのに

……

いや、だからこそ泣いたのかしら？

…そんな子供じみた理由で姉さんが泣くわけもないわ。

雪乃（姉さんが起きたら聞いてみましよう……）

むくりと身体を起こし、立ち上がった。

ヨロリ

しかし、急に立ち上がったせいかわち眩みしてしまい、小指の先をテーブルの足にぶつけてしまった。

雪乃「キヤツ!!……私としたことが、少々ドジを踏んでしまうなんて……比企谷君に笑われてしまうわね……」

はあ、と溜め息をつく。

幸い、誰も見ても聞いてもないので、恥を書くことが無かったのが幸い……

結衣『キヤツ!! っつて、ゆきのんもそんな声出すんだね、確かに、ヒツキーが聞いてたり見てたりしたら、笑われちゃうね?』

……え？

まさかと思ひ携帯をみると、未だに通話が切れていなかった。

雪乃「わ、忘れて頂戴……」

ま、まさか由比ヶ浜さんに失態を見せてしまうなんて……

うーんと、唸り声が聞こえた後に、由比ヶ浜さんがしゃべり始めた。

結衣『やだ、忘れない。だって初めて聞いたゆきのんのドジった声だもーん!』

雪乃「あなたねえ……」

はっ、と。

そこまで言つて、私は思った。

なぜ彼女は、こんなにも明るいのか？と

彼女は大切な人を失つてすぐに立ち上がる事が出来るほど強いとは思えない。

まあでも、それも私の推測なのだけけど。

それでも、彼女の事は全てとは言わないまでも、それなりには理解しているつもりではいるわ。

それを用いて考えても、やはりこの答えしか思いつかなかつた。

由比ヶ浜さん、あなた……

雪乃「……無理をしているの?」

私のために?

結衣『……っ……あ、あはは、そんなことないよ、ゆきのくん』

由比ヶ浜さん、一瞬言葉を詰まらせたわね……ということはやはり当たっていたのね。

雪乃「……はあ、凶星のようね。あなたが私を知っているように、私もあなたを理解

しているつもりよ？少しは信用して欲しいわ……」

結衣『う、うん……でも、何で分かったの？』

雪乃「そんなの簡単よ。一つ、比企谷君のことが有ったのに、あなたがそんなに明るい訳ないから。二つ、私の問いかけに対し、一瞬言葉を詰まらせたから。そして三つ目は――」

……まさか私がこんなことを言うことになるとは、思いもしなかったわね。

こんな性格で、高飛車で、友達なんて出来るはずもないいじめられっこだった私が、言うはずは無かったもの。

こんな、葉山君みたいな恥ずかしい言葉。

でも、やはり言わなければいけないと思った。

誰かに聞かれるわけでも無く、言わなければ今後の私の人生にそれほど大きな障害が残るわけでも無いけれども。

ただ、後悔したくないから。

恥を捨てて、正直な気持ちを、伝えるべきだと思ったから。

……なんだか、昔興味本位で手にとって、あまりの馬鹿らしさに二度と読まなくなった恋愛小説みたいね、私。

私は、二、三度深呼吸をして、伝えた。

雪乃「その、私はアナタのことを、友人だと思っているから。」
……恥ずかしいわ。

覚悟していたつもりだけれども、いざ言葉にすると予想を遥かに上回ってくるわね。

……そういうば、由比ヶ浜さんさつきから黙っているけれど、どうしたのかしら……
雪乃（ま、まさか、そう感じていたのは私だけで、私が

あんなことを言ったらせいぞろい）

結衣『へ？何言ってるの？ゆきのん』

雪乃「え？」

結衣『あたし達が友達な訳ないじゃん』

……そうだったのね。

私、舞い上がってしまったのかしら？

初めて私とまともに喋ってくれて、拒絶しないでくれた由比ヶ浜さんの優しさを、友情だと勘違いしてしまっていたのね。

そうよ、よく考えれば分かることじゃない。

……本当、滑稽ね。

結衣『友達じゃなくて、親友じゃん！』

雪乃「……は？」

結衣『あんなに本音が言えて、楽しくて、喧嘩もしたけどまったくついて、こんなの、親友じゃなきゃなんなんだー！って話だよ!!』

ゆきのんは、優美子よりも姫奈よりも隼人君よりもべつちよりもいろはちゃんよりも、ずーっと仲のいい親友だよ!』

由比ヶ浜さんは、力強く、耳が痛くなるくらいに、大声で叫んだ。
途端に、耳まで身体が熱くなるのを感じた。

ああ、そういうことだったのね。

さっきまで自分を卑下していた自分に寒気が走るわ。

初めてね。

嬉しさが顔が緩んでしまうのは。

比企谷君を亡くしたショックが無くなることは無いけれども、彼女のおかげで少し和らいだわ。

それにしても親友…私に親友…

雪乃「…ふふっ」

結衣『あー！ゆきのん笑ったー!!』

あ、

雪乃「あ、いえ、その、これは…その、」

こ、この私がしどろもどろになってしまふなんて…

羞恥心とは恐ろしいわね…今日二度目の辱めを受けてしまったわ。

こ、こんな時はなんて言えば良いのかしら？

こんな経験は無いから分からないわ…

結衣『あ、そーだゆきのん、お願いがあるんだけど…』

雪乃「え、ええ、何かしら？由比ヶ浜さん」

結衣『あたしのこと、名前で呼んでくれない？』

雪乃「…は？」

何故かしら？何故由比ヶ浜さんは突然こんなことを…

結衣「だめ…かな？」

雪乃「いえ、それは良いのだけれど…理由を聞かせてもらえるかしら？」

結衣『いやあ、せっかくゆきのんと、お互いに親友同士って確認出来たんだしさ、この際名前呼びの方が良いなあって思ったんだけど…さ。』

なる程、そういうことだったのね。

それでは由比ヶ浜さんの期待に応えなくてはいけないわね。

だって、他でもない、私の唯一の親友だもの。

雪乃「おほん、それでは……ゆ、結衣……」

結衣『うん！宜しくね、ゆきのん！』

……何で今日はこんなにも辱められなければいけないのかしら。

もしかして比企谷君の陰謀かしら。

せつかく収まった身体の火照りがまたぶり返して来てしまったじゃない。

今頃幽霊にでもなつて笑っているのでしょう。

根拠もないのに腹が立つなんて、あなたすごいわね、比企谷君。

というか……

雪乃「あなたは名前呼びでは無いのね……」

結衣『私のは愛称だからいいの！』

雪乃「そういうものなのかしら」

結衣『そういうものだよ！』

こうして、数十分前とは打って変わって、私の凍てついた心は、ほんの少しだけ、温もりを取り戻すことが出来た。